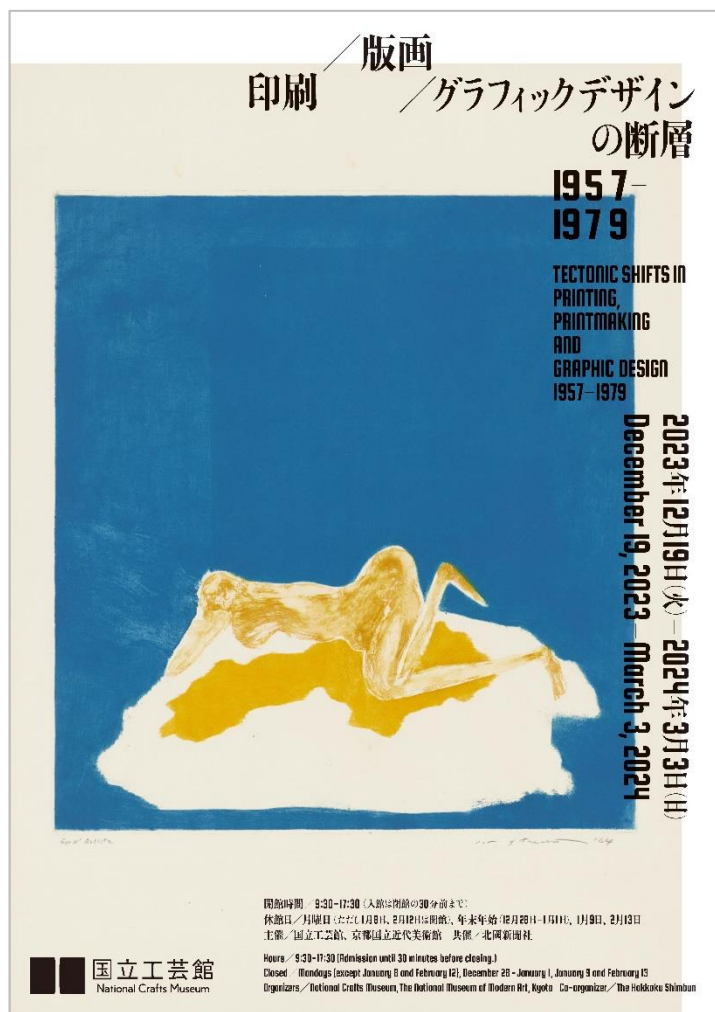


印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979

Tectonic Shifts in Printing, Printmaking and Graphic Design 1957-1979

2023年12月19日〔火〕－2024年3月3日〔日〕



開館時間：午前9時30分～午後5時30分 ※入館は閉館の30分前まで

休館日：月曜日（ただし1月8日、2月12日は開館）、年末年始（12月28日-1月1日）、1月9日、2月13日

観覧料：一般 300円（250円）／大学生 150円（70円）

*（ ）内は20名以上の団体料金および割引料金。＊いずれも消費税込。

*オンラインによる事前販売もあり。

*高校生以下および18歳未満、65歳以上、MOMATパスポート・学パスをお持ちの方、友の会・賛助会員の方、MOMAT支援サークルパートナー企業（同伴者1名まで、シルバーパートナーは本人のみ）、キャンパスメンバーズ、障害者手帳をお持ちの方と付添者（1名）は無料。

○割引対象：石川県立美術館・金沢21世紀美術館・石川県立歴史博物館・石川県立伝統産業工芸館（いしかわ生活工芸ミュージアム）・

金沢市立中村記念美術館・金沢ふるさと偉人館の主催展覧会入場券半券を窓口で提示した方。

主催：国立工芸館、京都国立近代美術館

共催：北國新聞社

掲載用問い合わせ先：050-5541-8600（ハローダイヤル）

戦後美術に「版」の可能性をひらいた多彩な表現を、 国立美術館所蔵の版画とグラフィックデザイン約60点でご紹介

展覧会概要

マス・コミュニケーション時代が到来した戦後の日本では、印刷技術の飛躍的な発展とともに美術と大衆文化の結びつきが一層強まり、複製メディアによる表現が関心を集めました。印刷／版画／グラフィックデザインという領域は近接し重なり合いながらも決定的なズレのある、まるで〈断層〉のような関係性であり、その断層の意味を積極的にとらえ直して自在に接続したり、あるいはその差異を強調するような、さまざまな実践が展開されていきました。

その舞台の一つとなったのが「東京国際版画ビエンナーレ展」です。同展は世界各国から作品を集めた国際的な規模の版画展で、1957年から1979年まで東京国立近代美術館、京都国立近代美術館などを会場に全11回が開催され、当時の気鋭の版画家やデザイナーの活躍の場となりました。本展は国立美術館のコレクションから東京国際版画ビエンナーレ展の出品作家を中心にをご紹介します。同時代の多様な視覚表現のなかに交錯した版画とグラフィックデザインの様相を通して、印刷技術がもたらした可能性とその今日的意義を改めて検証します。

あわせて、1977年に開館した東京国立近代美術館工芸館の記念すべき第1回目の展覧会「現代日本工芸の秀作：東京国立近代美術館工芸館 開館記念展」をふり返る特集展示も行います。東京国際版画ビエンナーレ展が開催されていた当時の、工芸の現代性にも目を向けていただく機会になれば幸いです。

展覧会のポイント

- ▶ 国立美術館のコレクションから、東京国際版画ビエンナーレ展の受賞作、出品作が勢ぞろい！
浜口陽三、池田満寿夫、菅井汲、加納光於、野田哲也、高松次郎、木村秀樹、井田照一など、「版」表現に挑んだ作家たちの代表作を一挙にご紹介。



野田哲也《日記 1968年8月22日》
1968年 東京国立近代美術館蔵

- ▶ 戦後美術の動向と切っても切れないのが、印刷技術の発展。
当時は版画とグラフィックデザインの関係性も議論の対象になりました。
原弘、田中一光、永井一正、横尾忠則、杉浦康平など、日本を代表するグラフィックデザイン界の巨匠たちが手がけた、東京国際版画ビエンナーレ展の貴重な展覧会ポスターも展示します。



横尾忠則「第6回東京国際版画ビエンナーレ展」ポスター 1968年 国立工芸館蔵

イベント

第9回東京国際版画ビエンナーレ展(1974年)で「京都国立近代美術館賞」を最年少で受賞した版画家の木村秀樹氏と展覧会企画者によるトークセッションや、版画のワークショップを会期中に開催予定です。

* 詳細はホームページにてお知らせしますので、当館ウェブサイトをご確認ください。

* 国内外の状況により記載内容に変更が生じる場合があります。

記者発表会・内見会

一般公開に先駆けて報道関係の皆さまのみの発表会、および内見会を行います。

12月18日(月) 午前11時30分～午後1時(受付開始 午前11時30分)

参加ご希望の方は、申込書に必要事項をご記入の上、メールまたはFAXでご連絡ください。

次回展予告

2024年3月19日(火)～6月2日(日)

卒寿記念 人間国宝 鈴木藏の志野展(仮称)

重要無形文化財「志野」の保持者(人間国宝)、鈴木藏(1934年生まれ)の作陶の軌跡と“今”を紹介します。鈴木は、薪窯でしか焼けないとされていた「志野」にガス窯で挑戦し、伝統を大切にしながらも独自のスタイルを確立していきました。2024年に卒寿を迎えるのを機に、初期から最新作までの優品を通して、その神髄に触れていただきます。



鈴木藏 《志埜大皿》
1991年 個人蔵



国立工芸館
National Crafts Museum

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-2
<https://www.momat.go.jp/craft-museum>

アクセス：

バスにて

JR金沢駅兼六園口(東口)より

【北鉄バス】

3番乗り場：どの系統でも乗車可、「広坂・21世紀美術館(石浦神社前)」下車徒歩7分

6番乗り場：乗車(「柳橋」行を除く)、「出羽町」下車徒歩5分

8番乗り場：どの系統でも乗車可、

「広坂・21世紀美術館(しいのき迎賓館前)」下車徒歩9分

車にて

北陸自動車道金沢西ICまたは金沢森本ICから20～30分。

近隣に文化施設共用駐車場(無料)があります。



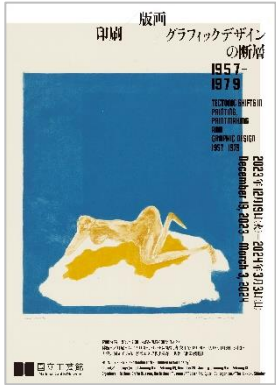
報道関係の方のお問い合わせ先

国立工芸館 広報事務局(株式会社OHANA内)

Tel: 03-6869-7881 Fax: 03-6869-7801

E-mail: ncm@ohanapr.co.jp

広報用画像一覧



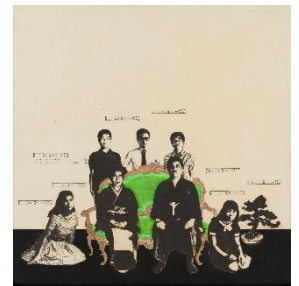
図版No.1 展覧会チラシ



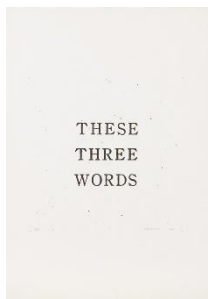
図版No.2
池田満寿夫《夏1》1964年
東京国立近代美術館蔵



図版No.3
菅井汲《青》1960年
東京国立近代美術館蔵



図版No.4
野田哲也《日記 1968年8月22日》
1968年 東京国立近代美術館蔵



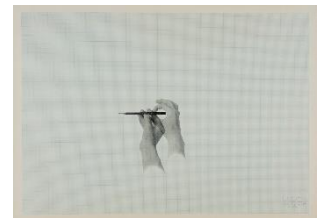
図版No.5
高松次郎《英語の単語》1970年
東京国立近代美術館蔵



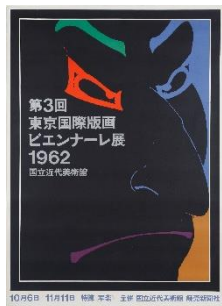
図版No.6
木村光佑《現在位置-存在A》
1971年 東京国立近代美術館蔵



図版No.7
榎倉康二《二つのしみ》1972年
東京国立近代美術館蔵



図版No.8
木村秀樹《鉛筆 2-3》1974年
京都国立近代美術館蔵



図版No.9
田中一光「第3回東京国際版画
ビエンナーレ展」ポスター
1962年 国立工芸館蔵
© Ikko Tanaka / licensed by
DNPartcom



図版No.10
横尾忠則「第6回東京国際版画ビエン
ナーレ展」ポスター
1968年 国立工芸館蔵



図版No.11
河野鷹思「現代日本工芸の秀
作：東京国立近代美術館工芸館
開館記念展」ポスター
1977年 国立工芸館蔵



図版No.12
荒川豊蔵《志野茶碗》1957年
国立工芸館蔵

上記画像No.1～12を広報用にご提供いたします。ご希望の方は当館ホームページの画像提供システムよりお申し込みください。



<https://www.momat.go.jp/craft-museum/reproduction>

*展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券（5組10枚）をご用意しております。ご希望の方は画像申請の際に「その他」欄よりお知らせください。